

福山大学客員教授、元経済企画庁長官

# 田中

TANAKA Syusei

# 秀征

さんに聞きました

## 近き人喜びて、遠き者来る

—— 少子高齢化、人口減少社会  
に向かっていますが、これからの  
日本についてお話しただけな  
いでしょうか。

**田中**—— 少子高齢化の流れとい  
うのは、その流れを覆すというこ  
とは非常に大事なことでけれど、現  
実にあるものとして厳しく受け止  
めるという姿勢から逃げがちな  
んです。こういう流れは、変えるこ  
とがきわめて困難であるという前  
提に基づいた政策の展開が必要だ  
と、いつも思っています。少子高  
齢化の流れに歯止めをかけるとい  
うことはきわめて難しい。経済社  
会の流れとしてはどこの国も味わ  
ったことですからね。それを覆す  
流れが日本にあるかというとな  
かなか見つからない。妙案があつ  
たらすでに歯止めがかかっている

のですから。もっと違う観点から  
見てみる必要がありますね。

残った人たちがどうやって気持  
ちよく生きていけるかが問題なん  
です。残った人たちが気持ちよく  
生きていける環境づくりをするこ  
ういうことは、出て行く人に歯止め  
をかける。「近き人喜びて、遠き者  
来る」、そこに住んでいる人たちが  
喜んで和氣藹々と過ごしている  
と、遠くから人が訪れて来る。観  
光地も同じですよ。新しくそこに  
人が入ってくるために、魅力的な  
ことを政策的に追加していくとい  
う話ではない。残った人たちの幸  
せを考えていくということが重要  
でしょう。

少子高齢化は特に地方に行く  
と、地域性が純化されてくる。本  
家・分家の関係とか、昭和二十年  
代くらいまでの共同体のようなも  
の、何百年も続いた氏子制度など、

いろいろ古いものが沈殿し、純化  
されて残ってくるわけです。そう  
いうものが見えない壁になってく  
る。それがいやで出て行くとい  
う人が出てくるわけです。だから、  
全体的に大きく、さっきの話と矛  
盾するみたいですが、全体的に大  
きく住む人が入れ替わるという、  
そういう発想をすることですか  
ね。今の人たちを核にして増えて  
いくという話ではないと思う。今  
の人たちは、とにかく、楽しく愉  
快に過ごしていけるように、その  
被害者意識を捨てるということだ  
すね。新しい人をいかに受け入れ  
るか、そういう問題です。

## 日本人の受容度の低さが ネックになる

—— もっと外国人を受け入れよう  
という話もありますが。

聞き手  
千葉利晃

中国支部全国大会  
実行委員会学芸部  
編集委員会 部長  
(福山大学)



田辺和康

中国支部全国大会  
実行委員会学芸部  
編集委員会 委員  
(福山大学)



**田中**—— これは非常に難しい。昔、  
故郷創生一億円事業のとき、信  
州で一番多いのは温泉を掘るこ  
とだった。温泉を掘って出たんで  
すよね。それに対して、隣村の人  
をその温泉に入れるかどうかと  
いう問題が出た。外国人の話に  
まで行かない。日本は外国人に  
対しても受容度が低いんだけれ  
ども、新しい人に対する受容度、  
そういう受容度の低さが、一つの  
日本的な障害にはなっています  
ね。受け入れられない、拒絶しちゃう  
んですよ。こういう体質とい  
うか、それが純化されていく。その  
人たちはその土地が好きだから。

## 社会資本が整備されるのは、 低金利で貯蓄過剰の時代

—— それでは社会資本整備につい  
てお伺いいたします。

**田中**——社会資本が整備されるのは、どの国にも共通した特徴があるんです。低金利で貯蓄過剰の時代なんです。これはフランスで言えばパリ改造のジャンバルジャンの水道の時期です。それから後は十九世紀のイギリス。アメリカは第一次大戦が終わった直後、そのわずかな間にマンハッタンの島の高層ビルが集中的につくられている。だから、どの国でもそうですが、二、三十年間に集中的に、社会的インフラをつくりあげている。債権国で、低金利で

貯蓄過剰という、そういう経済の著しい特徴のある時代になされる。八十年代からの日本がそうなんです。

宮沢内閣が誕生したときに出されたのが資産倍増政策、社会資本の倍増計画みたいなものです。そのときに、僕が手伝って宮沢先生が出した本が『美しい日本への挑戦』。生活大国五ヶ年計画を宮沢内閣でつくったときも、「美しい環境と簡素な生活」を、テーマにしたんです。当時、自民党の綱領を変えろというので、僕は起草



責任者で、そこにも「美しい日本列島」という言葉を入れた。

### 日本列島の 値打ちを上げよう

——美しい日本列島の話が出ましたが、景観政策についてお話しいただけますか。

**田中**——このように、景観政策については二、三十年前から非常に関心をもっています。なぜかというと、日本経済が衰弱するときに必ず来るというふうに僕は思っているんです。そのときに、日本列島に他の国からたくさんの人が出かけて来てくれるような、そういう環境を今つくっておくべきだというふうに実は思ってたわけです。

社会資本というのは、耐久性と、利便性と美観という三要素で僕なんか見るわけです。耐久性・耐用性の問題、利便性・実用性という部分は、日本は非常に高いものだと思う。

最近では、その耐久性、利便性、プラスチックの美観ということになると、日本は他の国に負けていないですね。そのくら

い日本は変わってきたと思うけれども、もっともつと専門家の人たちには、そちらの方向に真剣に目を向けてもらいたい。たとえば千曲川に三本の橋を架けるのだったら、二本にしておいて、その代わりその一本一本に個性のある橋をつくれ、そう言いたくなる。これはできない相談ではない。最近はそれなりに個性が出てきた。そういうほうが、同じつくるのだったら良いですよ。

今は、デザインとか、そういうところになつて来ていますね。その傾向というのは、他の国よりも日本のほうが強い。成熟段階にきたのでしょね。もつともつと磨きをかけて、一言で言うところ日本列島の値打ちを上げるということですよ。日本列島の値打ちを上げていくことをやってあげれば、将来的に、日本の経済力が弱まったときに、一つの支えになつていくだろうと、そういう観点からも、そうしなきゃいけないと、ずーと僕は思い続けているんです。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。